

い坂

下卷

山本周五郎

新潮社版

ながい坂（下巻）

昭和四十一年三月五日 印刷
昭和四十一年三月十日 発行

定価四五〇円

著者 山本周五郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話 東京(200)一一一一
振替 東京 八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 新宿 加藤製本

落丁本はお取替えいたします

ながい坂

下
巻

梅の井にて

「この御城下のようすはだいぶ変ったな」と男の一人が飲みながら云った、「大水の出た年のようすとはどことなく変ったようだ、そうは思わねえか」

「おらもそう気がついた」と伴れの頬冠りをした老人が云った、「あの水害のあった五年まえには、町の気分も穏かでおちついたものだったよ、ああ、おらは水害のあと片づけに雇われて来たもんだが、富公がめっぽう遊び好きで、毎晩のように白壁町へかよい詰めた」

「富公よりじいさんのほうが先達だったんじゃないかねえのか」

「まあどっちでもいいが」と老人はうまそうに酒を啜って云った、「水害のあと片づけぐれえの仕事で、毎晩のように遊べたってことも有難かったし、この町ぜんたいが暢びりとおちついていて、治世泰平とはこんな土地のことを云うのかと思っただもんだ」

「その、ちせえなんとかってのはわからねえが」と三人めの肥えた男が、しゃがれた声で云った、「そしてまた、五年まえのことはなんにも知らねえが、この御城下が、いまおかしなようすだってことには間違いがねえ、なにがどうだと数えあげるんじゃない、ぜんたいにこう、——なんて云ったらいいか、その、ひなたにいて冷たい風に吹かれる、っていうような気分がするな」

「町の者がみんな、お互いに顔色をうかがっているみてえだ」と老人が云った、「物の値段も毎日のようにあがったりさがったりするし、銭不足で店を閉める小商人が軒並みだし、秋になつてか

ら流行り病がひろがるし、なんだかしれねえが、いまにも大地震でも起こりそうな按配だぞ」
大造はお孝に酌をさせて飲んでいた。

「ええ、あたしもう一生、独りでくらしめてゆくつもりです」とお孝は云っていた、「あの人に死なれてからこっち、人を好きになるのが恐ろしいんです」

「もう五年以上にもなるんだろう」大造はうわのそらで書いた、「死んだ者に義理を立てるのも際限がある、いいかげんに諦めて、あんまり老けねえうちに嫁にいくんだな」

「義理を立ててるんじゃないやありません、誰に限らず人を好きになるのがこわいんです」

「城下町の気風は」と向うで肥えた男が云った、「どこでもそうだが、城下町の気風はその藩の、家中の動きに左右されるものだ、町の中がおちつかず、なにか浮き足だっているようにみえるのは、大きな声じゃあ云えねえが、御家中に穩かでねえ事が起こってるんじゃないやねえか、おらにやあそう思えてならねえ、そうじゃねえかと思えるふしがあるんだ」

大造はあたりを見まわした。店の中にはその三人のほか二た組、二人と四人づれの客があり、その六人もひそかに、三人組の客の話しを聞いているようであった。大造はお孝に、ちょっと、と云って立ちあがり、三人組のほうへ近より、すぐには話しかけず、三人の顔を順に、好戦的な眼で一人ずつ眺めまわした。

「おめえらだな」やがて大造が云った、「この城下のあっちこっちで、妙な噂をしやべりまくっているのは、そうだろう」

三人は黙っていた。

「どこのなにもんだ」と云って大造は飯台を力いっぱい叩いた。大きな手で力いっぱい叩いたから、音も大きかったし飯台の上の徳利や皿小鉢がはねあがった、「おめえらどこのなにもんだ、な

んのためにおかしな噂をばら撒くんだ、返辭をしろ」

「まあまあ」と頬冠りをした老人がいった、「そんなにどならねえで下せえ、親方、おまえさんばなにか感ちげえをしている、おらたちは漢子人足でなんにも知らねえ、噂話はおらたちがばら撒いたんじゃない、おらたちは噂話を聞いたほうだ、妙な噂を聞いたから、どうしたわけかと話していたんだ」

「ちよつと待った」と肥えたしゃがれ声の男が片手をあげて云った、「たいそう高い口をききなさが、おまえさんこそなに者だえ、町方のお役人でもあるんかえ」

「御材木奉行のお手先よ」大造は即座にやり返した、「お止め山ぜんたいの森番で、名は大造というもんだ」

「おらは房州、これは金助」と老人は肥えた男に頷き他の一人に頷いた、「それからそっちが伝、みんな堀の工事場で働いてるだよ」

「これからもそこで働いていてえなら」と大造が少し声をやわらげて云った、「つまらねえことを饒舌りあるくんじゃねえ、おらあ山係りだからいいが、町方役人の耳にでもへえたらしよつぴかれるぞ」

それは見当ちがいだ、妙な噂はこの町の者たちが弘めているんだと、肥えた男が云い、房州という老人が制止して、大造におじぎをし、これからは氣をつけるからと詫びた。大造は暫く三人の顔を眺めてい、それから自分の席へ戻った。他の二た組の客のうち、四人伴れのほうが勘定を出てゆき、それを送り出したおそめという女が、大造の側へ来て腰をかけた。二十四五歳になる固太りの女で、両のこめかみに梅干を貼りつけていた。

「お孝ちゃんはいまお燗直しにいったよ」とおそめが云った、「あいっら」とおそめは声をひそめ

た、「どこの馬の骨だかわからないけれど、いつもここへ来ちゃあへんなことばかり話してるんだよ、わざと人に聞えるようにき、親方が云ってくれたんで胸がすつとしたわ」

「おめえも土地の者か」

「三年ばかりよそへいってたけれど、生れて育ったのはここよ、町はずれの百軒ってところ、知らないだろうね親方なんぞは」と云っておそめは太息をついた、「貧乏人ばかり集まったごみ溜みたような、臭くってきかないぶっ毀れ長屋、そこで生れてそこで育ったのよ」

お孝が酒を持って来、おそめは立って、大造に笑いかけてから、二人伴れの客のほうへ去った。「あたしはらはらしちゃったわ」お孝は大造に酌をしながら囁いた、「あの人たちに構わないで、あの太った人は喧嘩が強くて、いつかもお店の外で三人と殴り合いをしたわ」

「うさん臭え野郎どもだ、なにかこんたんがありそうに思えてならねえ」

「いいわよおじさん、たまに山からおりて来るんですもの、そんなこと気にしないで、ゆっくりお酒をたのしむことだわ」

「岩さんて人は来るか」と大造は酒を啜りながらきいた、「町人みてえな恰好をしたお侍の人よ」
「ええ、ときどきね、——あの方ほんとお侍さんなんでしょうか、このまえなんか酔っぱらって、その土間へ寝たつきり動かなかったのよ、大きな声で唄をうたったり、わけのわからないことをどなりちらしたりして、まるで流れ者のやくざみたようだったわ」

「なにかわけがあるんだらうよ」と大造が考えながら云った、「あの人はお侍にちげえねえし、お侍となるといろいろ、おらたちには察しもつかねえような、役目のうらおもてがあるらしいからな、ま、そっとしておくんだな」

「おじさん今夜は酔わないのね」

大造はなにか云いかけたが、髭だらけの頬を掻き、頭を横に振った、「酔ってるさ、いい心持だ、お侍には酔いつぶれても駄面がありお役目もあるが、おらたち山の者は身軽だからな、——尤もこんどの小屋頭が氣にいらねえひよつとこだから、山へ帰るのがいつもおっくうになっていけねえ、もとの平作ってえ小屋頭はいい人だった、おらとはまるできょうでえみてえにしていたもんだ」

「その人、どうかなすったんですか」

大造は答えずに眼をつむり、すっかり灰色になった頭を、ゆっくりとまた左右に振った。

十六の一

主水正もんどおしやうがくぬぎ、林の中で、くぬぎの落葉の舞うのを眺めていると、その男が静かにあゆみ寄つて来た。林は半ば裸になり、枝に残った葉が、風もないのにしげんと枝からはなれ、ゆっくりと左右におよいだり、円を描いたりしながら舞い落ちるのであった。植えてから十年あまり、くぬぎは幹も太くなり丈も伸びている。三十本あまりの内、枯れたのが五六本もあったが、弥助がすぐに若木を植え直したので、主水正の望みどおり、いまでは素朴なやまがのふぜいをあらわしていた。母屋とその林とのあいだには、芒すすぎがひろく茂り、野茨のいばらがところどころに蔓を伸ばしている。芒の穂はほおけ、葉は茶色に枯れ、野茨の蔓には小さな紅い実が付いていて、小鳥が二三羽、その実をついばんだり、急に飛び立って芒の中へ見えなくなったりした。

「弥助、——おまえにこのけしきを見せたかった」と主水正は呟いた、「おまえには私がなにを欲しがっているか、こまかいところまでよくわかってくれた、石ひとつ入れず、池も掘らず、私の

考えていた自然のままの、少しの気取りもない野末のけしきを作ってくれた、芒の中を曲り曲り来る小道も、そこに撒かれたまばらな小石も、すべて私の望んでいたとおりのだ、これらはすべて一寸も動かせない、私の生きている限りこのままにしておこう」

どんなに費用をかけ、贅をつくして造った庭も、このけしきには遠く及ばない、弥助はとし老いた身で、誰の助力もかりずにこれを作った。そして弥助が死んで二年めになるいま、主水正は空想したとおりの、殆んど望みどおりの景色の中で、くぬぎの落葉する音に聞きほれているのであった。そこへ、その男があらわれたのだ。

男は継ぎはぎだらけの、垢じみた、腰きりの半纏に、よれよれの細帯をしめ、素足に草鞋をはいていた。腕組みをした太い手も、裸の脛にも黒い毛が密生してい、それが肉の厚い、逞しい軀つきによく似合って、若い野獣のような精悍さを示すようにみえた。両の頬から顎まで、黒い剛毛に掩われた顔は、眉が太く、眼がするどく、左右の耳が大きく張っており、総髪のまま一と束ねにした頭の毛も、いま藪からとびだして来た毛物のように、ばらばらに乱れていた。――男がどこから庭へはいって来たのか、主水正にはわからなかった。落葉を踏む音で気がつき、男が近づいて来るのを黙って見ていた。男は少しのためらいも遠慮もなく、まるで自分の庭をあるいているような、おちついた、しっかりした足どりで来て、十尺ほどのまをおいて立寄り、するどい眼を細めて、じっと主水正の顔をにらんだ。ほぼ二十拍子ばかり、二人はなにも云わずに、相手の顔をみつめあっていた。

「いいつらだ」とやがて男が云った、「あなたが三浦主水正だな」

主水正はかすかに頷いた。

「おれは七日間、あなたの出入りを見ていた」と男は続けた、「評判どおりの人物かどうか知れた

かったのですね、——あなたは気がつかなかったようだな」

主水正は唇をちよつと曲げただけであつた。男の乱髪の上にくぬぎの落葉が一枚ひっかかり、男はそれを払いのけながら、一瞬間も主水正から眼をはなさなかつた。

「あなたはむつとりやだな」と男は云つた、「いつかあなたは江戸屋敷へ来たことがある、二年か三年いたかな、七八年まえだつたらう、おれはまだ十九か二十で、あなたのことなんぞにはなんの興味もなかつた、田舎侍がなにか勉強をしに來た、氣むずかしいむつとりやだ、あれがその男だと教えられる、幾たびかあなたの姿を眺めたものだ、評判どおりそつけない、ぶあいそな顔つきで、江戸屋敷の者とはついに誰ともなじまなかつた」

主水正は肩にふりかかる落葉を払つた。三十一歳になつた彼の顔は、陽にやけて黒く、眼尻に皺が刻まれ、額にも三筋の皺がはっきり刻まれていた。けれども彼の表情は少しも動かず、男を見返す眼にも、好奇心のようなものさえあらわさなかつた。主水正は口をつぐんだまま、小さな腰掛に掛けていた。その腰掛も弥助の作つたものであり、よく枯らした檜材で出来ていて、一人分しか掛ける余地はなかつた。

「うん」と男は唸つてからきいた、「あなたはおれが誰だか知りたくはないのかね」

主水正は冷ややかに首を振つた。

「どうして知りたくないんだ」

主水正は低い声で答えた、「私はあなたを招いたわけではない」

男は白い歯をみせ、「ああそうか」と大きく頷いた、「ようやくお言葉が下がったわけか、話しをしてもいいかい」

主水正はなんとも答えなかつた。

「お許しを得て安心した、そこで初めに忠告しておくが、あなたは首を覘われている、三浦主水正の首を搔くために、五人の者がまもなくこの城下へ来る筈だ」

主水正はこんども無言だった。

「信じないんだな」と男が云った、「五人の刺客が来ると云えば思い当る筈だがな」

「その次を聞きましょう」

男は意表を突かれたように、ちよつと口をあき、それから唇で微笑した。

「城代家老の交代だ、そして第三は、堰の工事が廃止になる、大きなところだけで以上三件、ほかにもこまかい事はいろいろあるが、いま云った三つのことだけで、なにが起ころうとしているか察しがつくと思う」

「あなたが誰だか、まだ私は聞いていない」

「おれが誰であろうと、いま云ったことに変わりはないんだ」

主水正の眼が静かに光った。男はじれったそうに片手を振った。

「いいだろう」と彼はやむを得ないといったげに肩をすくめた、「大事なのはおれが誰だかではなく、おれの云った事実のほうなんだ、必要のない限り名などは披露ひろうしたくないんだがね、あなたがそうこだわるのなら」

「いや」と主水正が遮った、「云いたくないのならそれでいい、私もかくべつ姓名にこだわっているのではない、しかし、ただ風の送ってきた噂のようなことを、そのまま私に信じさせようというのはむりだろうな」

「首を斬られてからなら、信じるか」

「もう帰るほうがいい」と主水正が云った、「家の者がこっちへ来るようだ」

「大沼の上にある紅葉橋を知っているな」と男は云った、「橋の向うに白鳥神社というのがあゝ、明晩およそ酉の刻にそこで会おう」

「なんのために」

「来てみればわかるさ」男は立ち去ろうとして振り返り、「おまえさんには失望したよ」と無遠慮に云った。

茶と菓子の盆を持って、芒の中の小道を芳野が近づいて来た。芳野は男を見たらしい。男はくぬぎ林の中を、もと来たほうへゆっくりとあゆみ去った。その姿が芳野の眼についたことは慥かだ。けれども芳野は、まったく気づかなかつたように、側へ寄つて来、持っている盆を腰掛の端へ置いた。

「小出と仰しやる御老人がおみえでした」芳野は跼んで茶を注ぎながら云った、「御存じの方でございますか」

主水正はその名を思いだすのに、ちょっと暇がかかった。そしてやがて、私の先生だ、と頷いた。

十六の二

芳野は主水正に茶をすすめ、菓子鉢の蓋を取った。

「私の少年時代の先生だ」と主水正は茶碗を手に取りながら云った、「待っていらっしゃるのか」「お庭だからと申上げましたら、こちらへ来ると仰しやいましたそうで、いま杉本さんが案内していらっしゃる筈です」

それは失礼だった、呼びに来ればよかったのに、と主水正が云った。取次に出たのは杉本さんで、わたくしはお茶の支度をしていましたから、と芳野は弁解した。

「お客間で御接待をなさいますか」

「あとで知らせよう」と主水正が云った、「これでは狭いから、誰かに床几を持って来させてくれ」

芳野が去るのと殆んどいれちがいに、杉本大作が小出方正を案内して来た。小出は六十歳を少し出たばかりの筈だが、見ちがえるほど老けたし、軀も小さく、痩せちんだように感じられた。主水正は立ちあがって迎え、小出を腰掛に掛けさせた。

「そんなに鄭重では困る」小出は主水正の挨拶を遮って云った、「領内測地の御用が終わったとうかがい、お祝いを申し上げます、ちょっと寄っただけです、どうか構わないで下さい」

主水正は床几のことを杉本に告げ、杉本は承知して去った。

「あなたらしいな」小出はくぬぎ林を眺め、しきりに舞う落葉に眼をとめた、「いかにもこれはあなた好みの庭だ、谷さんがいたじぶんには、むやみに石燈籠やなにかが、ごたごたうるさく並んでいましたがな」

「ここへおいでになったことがあるのですか」

「ごくたまにでした、それも二度か三度くらいでしょうかな、あのころの谷さんの颯爽たる姿は忘れられません」

杉本が床几を持って来て据え、主水正はそれを小出方正の斜めに置き直して掛けた。杉本はなにか用があるかというふうに見、主水正の表情を読み、会釈をして去った。

「私はこのごろおめにかからないのですが、すっかりお丈夫になられたそうですね」

「いちじは重態で、医者も余命を気づかしたそうですな、私は知りませんでした」と小出が云った、「その病気が恢復し、お子たちを儲けられてから、人が違つたようになられ、いまでは酒も断ち、熱心に私塾で教鞭きょうべんをとっていらつしやるということです」

「お子たちというと、一人ではないのですか」

「女のお子について、去年また男のお子が生れたと聞きました」

主水正は急に眼をそらし、どこか痛みでもするように、つよく顔をしかめた。花木町の家のこととを思いだしたのだ。

「今日はなにか」と主水正は話しを変えた、「私に御用でもあったのですか」

「用事というほどのことでもないが、御実家の阿部さんにある蔵書のことと、ちよつと」小出はふところ紙を出して漢をかみ、その紙を丁寧にしたんで袂に入れた、「詳しい事情はわかりませんが、あの書物が少しずつ売られているようで、あれだけのものがばらばらになるのはもったいない、揃そろっていてこそ阿部家の蔵書として価値もあり、役にも立つというものですから、できることなら散逸さんいつを防ぎたいと思うのですが」

「ああそのことです」主水正は困つたといったげに頭をさげた、「私もずっとまえから気にかけていたのですが、阿部では金に替へたいようすですし、私には纏まとまつた金を出すほどのゆとりもないものですから」

小出方正は頷いた、「私も藤明塾か尚功館で、買取ることができないかどうかと、あちこち當つてみたのだが、それが耳にはいったものかどうか、阿部さんのほうは金高を上げるばかりで、どうにも話しがまとまらないのです」

「もっともいい方法は、藩の御文庫へ納めることだと思ひました」と主水正は云つた、「しかし阿

部が慾にかられたとなると、ただ納めるだけでは承知しないでしようし、さればいってお手許金を下げていただくわけにも、まいりません、あの蔵書の散逸を防ぐには、殿のお声がかりで召上げを仰せつけられる、という手段しかないと思います」

「あなたの力で、なんとか穏便なはからいができないものでしょうか」

主水正はかすかに首を振った。いつか年の暮に、小四郎が金を借りに来てから、もう五年以上も阿部とは往来が絶えている。こっちも役目が多忙で、身心ともに暇がなかったし、たとえ暇があったとしても、たずねてゆく気にはならなかったであろう。蔵書のことなども、いまでは関心がない。小出方正に指示されて、少年じぶんからしらべられるだけしらべたが、「拾礫紀聞」のほか数種の記録書を除けば、いまさら散逸を防ぐ手段をとるほど、貴重なものはないといつてよかった。

おれはいまそれどころではないのだ、と主水正は思った。つい先刻、正体不明な男から聞いた言葉が、彼のあたまでしだいにふくれあがり、形容しようのない大きな力で彼を圧倒していた。男の云ったことが事実そのままでないとしても、江戸屋敷から来た人間だという慥かな裏付けがあるし、かなり高い身分だということも察しつく以上、三力条については対策を立てる必要があるだろう。五人の刺客が来るということはべつだ、それは自分ひとりの問題であり、現実に当面してみなければ手の打ちようがないからだ。——しかし他の二力条は、と考え進めていって、主水正は息をのんだ。城代家老の交代も、堰堤工事の廃止も、藩主飛驒守の意志なしではおこなえないことだし、もしもそれが飛驒守の意志だとすれば、どんな対策を立てても効果はないだろう。つき詰めて考えれば、飛驒守昌治の意志がなぜそんなふうに変ったか、その意志を止めることができるかどうか、という一点だけにしぼられるのだ。